# 飛翔62号　目次

## 特集


社会に出てからの仕事と大学で学べること ―― 5
第1回マスコミ・報道編
インタビュー　中国新聞社
朝日新聞社
中国放送
NHK

インターンシップ ―― 15
インタビュー　小笠原美音さん
北岡美紗さん
吉田操さん

巻頭言 ―― 4
研究室紹介 ―― 19
施設紹介 ―― 26
ボランティア室
ピア・サポートルーム
学士会館
総科昔話 ―― 34
エッセイ ―― 38
エコミュージアムとホタルの宿
研究レポート ―― 40
モルフォロジーと画像解析
シネマトピックス ―― 42
後援会 ―― 43
読者からの声 ―― 44
人事異動 ―― 45
編集後記 ―― 46


もくじ



# 総科昔話 写真館

総合科学部が広島市内にあった時代の写真です。
くわしくは34ページへ

## むかーし

私はサークル棟。どう？この情熱。

学生ならたんと食べんさいや～！

校舎が足りなかったから、
ワタシタチまで駆り出されたの。

よく学びよく遊べ

よろず屋

# 巻頭言

前総合科学部長　江口正晃

## 二十一世紀を担う君たちへ

新世紀幕開けの2001年は、9月の同時多発テロという前代未聞の事件を契機として始まった。また、国際的な景気後退とアメリカをはじめとする国々がアフガニスタンへの軍事行動へと進んだために、我々の期待を大きく外れてしまうものとなった感がある。一方で、IT化による急激な国際化と日本の経済停滞は、ここ数年にわたって、卒業者諸君には未曾有の就職難をもたらしている。しかしながら、大学生全般の就職率が低かったにもかかわらず希望する企業等に就職できた人がたくさんいるのも事実である。就職できた人と、残念ながらそうでなかった人との間に何か違いがあるのだろうか。

入学時のオリエンテーションの際にも述べたように、総合科学部が描く、我が学部で育てたいとしている卒業生像は、実は、社会（多くの企業や官公庁等）が求める人材像に非常に近いものがある。昨年十一月に総合科学部の教職員のために開催した「就職講演会」において、講師の日産自動車の渡邊常務は、企業サイドの人事担当者としてどういう学生を採りたいかという話の中で、①何が得意か、主張点を持った「Specialist」、②自立心を持った自らの考えで行動できる「Strong Individuality」を持った人、③いろいろな可能性や幅広い「Good Experiences」を持った人、④「Communication in English」のできる人、がほしいと言っておられた。この方はゼネラリストよりスペシャリストを採りたいといわれたが、この点は、会社が製造業であることを反映しているのであろう。以前、就職先開拓のために訪問したあるサービス業の企業では、幅広い視野から物が考えられ、相手の立場でものを見る能力を持った人がほしいとも言われた。狭い範囲で専門性を持っていてもすぐに役に立たなくなるから、いろいろな新しい局面に対応して幅広い視野から問題解決の方向性を発見できるような総合的な判断力を持つこと、基礎的な分野をしっかり自分のものとして身に付けていることを求めているとのことであった。両者での人材像は多少の違いはあるもののほぼ一致していると私は見ている。

これらのことは、皆さんが、自分は学生時代をどのようにすごし、これから何をなすべきかを（あるいは新入生諸君には、これからの学生生活をどのように過ごそうかと）考える際にきっと役に立つに違いない。

次の時代をになう皆さんに、新しい世界での大いなる健闘を祈りたい。



# 社会に出てからの仕事と大学で学べること

## 第1回マスコミ・報道編

### はじめに

出口の見えない不況、失業率の上昇。20代の失業率はすでに10%を超える勢いだ。
そんな中、広島大学でも学生の就職意識の低さを危惧する声があがっている。
「就職説明会に参加する学生が少なすぎる。」と大学側は嘆く。

一方、学生側にも言い分はある。
「社会が見えない環境で、どんな仕事を選ぶかなんて言われても。」
たしかに、西条のような田舎では社会を知る機会は少ない。
判断材料がないのに考えられるわけがない。
限られた生活空間の中では、不況も目に見えてこないし、
親からそれなりの仕送りをもらっていれば、食べていくのにも困らない。
そんな環境で就職への危機感など生まれるはずがない。

社会ではどのような仕事が行われているのか。
大学で学んだことがそこでどのように活かされているのか。
もちろん、大学で学ぶこと全てが就職のためにあるというわけではないが、
今回の特集では、「社会に出てからの仕事と大学で学ぶ（べる）こと」をテーマに、
社会の第一線で働いている先輩方に直接話を伺ってみた。
前述のような環境に住む学生にすこしでも参考にしてもらえれば幸いだ。

特集

取材・文／堀部正拓、鮫島和美　写真（一部）／山下純

# 中国新聞社

●伊藤記者
中国新聞社
社会・経済グループ記者
総合科学部01生

## 新聞記者になろうと思ったきっかけは？

**A 勉強しながら働けるような仕事がいいなあと思って…**

就職活動は大学4年の春くらいに始めました。私はずっと広島なんで、地元に足をおいて勉強できるような仕事がしたいなあと考えていました。

総科って中途半端なところがあるじゃないですか。専門性が深められないというか、広く浅くという感じで4年間終ってしまうというか。それがちょっと嫌で。やっと「勉強って面白いのかもしれない」と思い始めたときには就職活動卒業でしょ。もうちょっと勉強しときたかったという気持ちが、そのころやっと芽生えてきたんです。

で、はじめは安易に大学院に行こうと思ったんですよ。そしたら、「来てくれるな」という雰囲気だったんで（笑）。勉強しながら働けるような仕事がいいなあと思って、次に頭に浮かんだのが行政職とマスコミ。

今まで勉強してきたことがなんかの形でつながりながら、かつ勉強を続けていけるような職業がいいなあと思って…。まあどんな職業でも勉強はあると思うんですけど、そのときはその二つかなって思ったんです。

で、広島市役所は落ちて、NHKと地元のマスコミを2社うけたんです。その際、最終的にテレビ局か新聞社のどちらかを選ぶことになりました。

それで、活字の方が向いていると思ったので、7月くらいに中国新聞社から内定をもらったんです。今でもその選択は間違ってなかったと思いますね。

## お仕事は楽しいですか？

**A こんな面白い仕事はないと思います**

自分を成長させてくれる仕事ですからね、自分は恵まれているというか、運がよかったと思います。

普通の生活をしていたら絶対に出うことのない人に会って、その人の家族でも聞けないようなことをズケズケと質問しないといけないんですよ。

取材は難しいけれど、楽しいですね。原稿書くのは苦手なんですけど（笑）取材しているときはホント至福です。

## 記者という仕事のやりがいは？

**A 世の中をよくしていきたいと思いますね**

これは記者をやりながら次第に思うようになったことなんですけど。自分が記事を書くことで世の中がよくなればいい、幸せな人が増えればいいと思いますね。

でもそれは記者が一方的に考えているだけであって、現実がどうなっているかどうかはわからないのですが…。そうでありたいとは思います。

記者の仕事はやれるまで続けたいですね。定年するまで続けたいくらいです。今までで一番心に残った取材はハンセン病についてですね。

岡山県にはハンセン病の療養所が2つあるんですけど、そのうちの1つにしばらく通っていて…。そこに暮らす元患者さんたちは瀬戸内海の島の中に隔離されていて、ひどい差別を受けてこられてるんですね。

彼らと出会ってお話をきいたことから人間が生きることの重みを教えていただきました。





難しいですねー、記者が人を傷つけることもあるし、あるいは何かを明らかにすることで迷惑を受ける人もいますから…。

そう願うけれども、新聞社の驕りなのかもしれません。かえって世の中を悪くしているのかもしれませんね。責任の重さを感じます。

## 学生時代に身に付けたことは今の職業で活かされていますか？

身に付けたこと、というのは「講義で学んだこと」という意味でしょうか？大学で学ぶということは、例えば刑事訴訟法や、地方自治法の仕組みを学ぶというのもあると思うんですけど、それ以上にその教官のものの見方とか、社会の見方とか、価値観を学ぶということが大切だと思うんですよ。

憲法の教官が100人いれば、100の憲法論があるわけで、自分がどの先生からどういうものの見方を学ぶかということが大学時代ではないでしょうか。

その意味でいえば、大学時代に総科で出会って、多くの先生方から教えていただいたことというのは役に立っていると思います。

それに、何を勉強したから新聞記者になれるとか、何を勉強したから記者人生に役に立つというのは人によって全然違うと思うんです。

たしかに短いスパンでいえば、刑事訴訟法をとったり地方自治法をとったりしといたほうが便利なんですけど、それは本を読めばわかることである程度までは…まあ読む時間がないのが現状ですが（笑）

もっと大事なのはそれぞれの学問を通じて人をどうみるかとか、社会をどう見るかとか、そういうことを学ぶことが学生時代に必要なことだと思うんですよ。

それがあれば記者になってから新聞記者に必要な学問は実地で身についていきます。学生時代は自分がおもしろいと思うことをとことんやってみる中で、自分らしいものの見方とか人との関係をつくっていくことが一番大事なんじゃないでしょうか。

あ、あとで勉強したからって身に付くかどうかは別ですよ。入門編くらいしかわからないから。それが新聞記者の限界でもあって、何でも首をつっこむし、好奇心を持つけれども研究者の人たちがやっているとこまではどうやっても たどり着けないわけで…。そこが新聞記者の弱さだと思うんですよ。

そういう意味では大学時代に誰にもまけないというような専門分野を持っておくことも大切だと思います。さっきの話と少し矛盾しますけど（笑）。広く浅くでも、専門分野でも…両方ですよね、活かしかたによると思うんです。

## どのような学生時代を過ごされたのですか？

非常にまじめに講義に出ていましたよ、サークルはやってなかったです。私はアルバイトで予備校のチューターを3年間やっていました。これは大きな財産になったと思います。

何十人もの高校生に勉強方法などでアドバイスしていました。彼らは生き方も考えもそれぞれ全く違うんです。あのアルバイトを通して多くのものを身に付けました。

## 学生時代にもっと勉強しておけばよかったと思うことはありますか？

それは英語ですね。というか英語に限らず語学全般。私、語学苦手なんですよ（笑）。

広島は外国の方たくさんこられますから、インタビューするとき恥ずかしいですよね。「あー勉強しとけばよかった」といつも反省しています。

まあマスコミに限った話ではないでしょうけど、やはり語学は大切ですね。

## 今の学生に何か一言

若いころはどうしても仲のいい人同士で固まりがちですよね、だから狭い世界での付き合いだけになってしまう。もったいないですよ。もっと色んな人と付き合えばいいのにと思いますね。

世の中は学生に対して寛大なところがある。ある意味で若さというのは武器なんですよ。だから胸をかりるつもりで社会に当たっていったほうがいいです。

遊んだりオシャレしたりすることは社会人になってからいくらでもできる。でも社会人になってからではもう甘えが許されないわけです。「教えてください。」と言っても簡単に教えてもらえるわけがないし、自分の失敗には自分で責任を負わなきゃいけない。

将来を期待される学生だからこそ社会に胸をかりて勉強できることがある。これは恵まれた特権だと思うんですよ。もっと活かして欲しいですね。

# 朝日新聞社

## 新聞記者になられたきっかけは？

**A** 世の中が少しでも良くなればと思って…

私は生まれ育ちが沖縄で、大学は慶応大学の総合政策学部というところの出身です。たぶん広島大学の総合科学部とシステムのよく似た学部だと思います。

それから大学卒業後3年間ほど財団系のシンクタンクにいました、朝日新聞に入社したのはその後です。

記者になって自分が記事を書くことで世の中が少しでも良くなればと思っていたのですが…難しいですねー。取材で人を傷つけることもありますし…。

人の心をうつ記事を書くどころか、それ以前に取材相手と心を通わせることさえ難しいんですよね。だから「何やってんだろー、私」と思うことがよくあります。

●吉浜記者
朝日新聞広島支局
県警担当

慶応大学
総合政策学部卒業

## 全国紙と地方紙の違いは？

**A** あまりないような気がします。

地方紙で働いたことがないので、はっきりとしたことは言えませんが、全国紙の支局でも地方紙でも仕事は忙しいですよ。記者という仕事は朝早くから夜遅くまで走り回っているので終わりがありません。

広島は夕刊地域ではないので基本的には仕事は朝刊のみなのですが、何かあれば大阪の夕刊に出稿することもあります。

地方紙と全国紙の違いはあまりないような気がするんですけど、人員の面ではあります。

例えば地方紙の中国新聞社さんなんかは県警でいえば、広島県内にたくさんある所轄署に記者室をいくつも持ってらっしゃるようですが、うちは一人の記者が何箇所も掛け持ちしています。

今の広島支局はライター9人と、デスク、支局長でやってます。

記者は大体2、3年で支局を移動するんです。短い期間で他の土地へ移動してしまうということは悲しいことではありますけど、逆に言えば、短期集中でたくさんのことをやらなければならないし、それを通して身につく能力があります。例えば順応性とかね。それに日本各地で知り合った人は財産だと思いますよ。

外からこないと見えないもの、住んでいてはわからないこともありますよ。いい意味でも悪い意味でも取材対象を客観的に見ることができるというか…。

## テレビ記者との違いは？

**A** 一言一句にものすごく神経を使います。

私はテレビの制作のことをあまりよく知らないのではっきりとした違いはわかりませんねー。

新聞は何度も何度も読み返します。だから新聞記者は一言一句にものすごく神経を使います。やはり文字だけを使って伝えるのと、言葉プラス映像で伝えるのとでは、多少違いはあるでしょうね。





## 学生時代に身に付けたことは今の職業で活かされていますか？

**A** 過去に戻れるならば…

総合政策学部で社会思想の勉強をしていたんですよ。そこでナショナリズムの研究をされている先生に師事して、特に歴史教育についての研究をしていました。

大学で学んだことというのは正直言うといまひとつ活かされてないと思うんですよ。自分の勉強の仕方が悪かったのもあると思いますけど、八方美人になってましたからね。過去に戻れるならば、法学なら法学、物理なら物理というように何かを掘り下げたいです。

たしかに色々なものに食いつくということでプラスになったものはあると思います。

でもやはり何かひとつ強いものを持っていたほうが潰しが効きますよ。ひとつのものを掘り下げないと、浅はかに色々な人の論をたくさん知っているだけで終ってしまう。何かひとつの分野でもいいので、「自分の論」を組み立てるべきだと私は思います。自戒を込めて（笑）。

そうそう、これは仕事とは直接関係ないんですけど、学生時代に文化系のサークルに入っておけばよかったと思っています（笑）。

私、バレーボールのサークルに入ってたんですよ。でも社会に出てから完全に運動する時間がなくなっちゃったからねー（笑）もう全然役にたってないです。

あ、バッティングセンターが趣味なんですよ、前の仕事で新宿にいたころから夜な夜な歌舞伎町のバッティングセンターで鍛えてまして。でも…これもねえ（笑）。

例えば絵とか俳句とかね、せっかく時間があるんだから、何か一芸披露ができるようなものをやったほうがいいと思いますよ。

## 今の学生に何か一言

**A** 低レベルのもので満足しないで…

新聞記者を目指す人にアドバイスできることは「新聞を読む」ということぐらいです。

あと、せっかく学生っていう身分と時間があるんだから、同じ仲間だけで固まらずに色々やってほしいなと思います

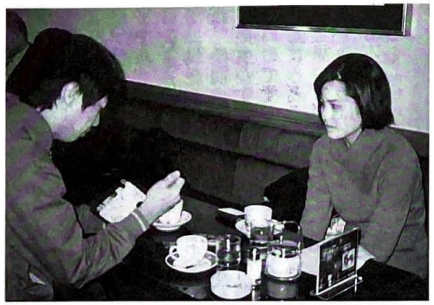
同じようなシステムの学部にいた先輩として言えることは、総合的な学習をする学部では講義を聴いただけで偉くなった気分になってしまって自分で考えることが疎かになってしまうことに気をつけてほしいです。

先ほど言ったことの繰り返しかもしれませんけど、人の論ばかり借りて、ただ単に「色んな人が色んなことを言っている」という結論だけに陥ってしまう危険性があると思うんですよ。

「この人はこう言っている、一方でこの人はこう言っている。…だからこうなんじゃないだろうか。」という論理は学生のときには通ってしまうことがあるんですけども、社会に出てから、特に記者に求められるものはこれだけではありません。

新聞記者という仕事は自分の論が求められます。学生のときには人の論を受け入れるだけではなくて自分で論を組み立てる作業をやって欲しいと思います。

記者というのは「意識すれば勉強できる」仕事だと思います。意識しなかったらただ日々の仕事に追われるだけで終ってしまうような気がします。



# 中国放送

●檜高記者
RCC中国放送
報道制作局
報道センター
県警班

## Q テレビ記者とはどのようなお仕事ですか？

## A 原稿だけでなく、映像がついてきます。

記者という仕事は、字のごとく、原稿書き屋さんです。しかし、テレビの場合は、原稿だけでなく、映像がついてくるので、取材する対象を、どう原稿と映像で表現するか、それを考えながら日々、実践しているのがテレビ記者という仕事です。

取材のネタは、自分で探せれば一人前なのですが、わたしのように未熟な記者には、なかなかいいネタを拾えないんですよね（笑）。

しかし、私はどんなネタでも、うまく料理したいという気概は人一倍あります。ちなみに私は県警（広島県警察）の担当です。

記者の仕事では、自分の知りうる取材内容を、世の中の視聴者にどうプレゼンするかも重要です。

自分だけがわかっているのではどうしようもないわけで、言葉と映像を駆使してそれを視聴者に伝えなければならない。

だから、放送を通じて、視聴者にインパクトと真実を伝えることができた時の達成感は記者の生きがいともいえると思っています。

記者の仕事の実情がクローズアップされることは少ないと思いますが、この職業は労働条件ではなく、やりがいと達成感を求めて生きている人が多いのではないでしょうか。

逆に言えば、それはこの仕事が自分の人生すべてをかけてもいいだけの価値を持っていることを示しているのかもしれませんね。

## Q 大学では何を専攻されていましたか？

## A 心理学の実験心理学という分野です。

私は広島大学教育学部の出身です、大学院も広島大学で、その後RCC中国放送に入りました。

大学では心理学を学んでいたんですよ。こころというブラックボックスを解明しようとする学問です。

そして、その心理学の中でも実験心理学と言う分野を専攻していて、心的活動をなるべく物理的な尺度で測定し、数値化することを研究していました。

当然、統計処理技術も必要であるし、さらにはコンピュータのプログラミング技術までも必要でした。

## Q 大学で学んだことは今の職業で活かされていますか？

## A 間接的には活かされています。

うーん、そうですねー。直接活かされているものはありませんが、間接的には活かされているかもしれません。

例えば、専門分野での考え方や知識、話題などが仕事で役に立つことはあります。

それと、大学時代の人付き合いが、仕事上役に立ったこともありますね。ただ、大学時代は研究職に就きたいと思っていたのですが、現在の職はテレビ記者ですよね。学問の分野上、知識を仕事に直接生かすことはどう考えても難しいのですが、どちらも真実を追究しようとする姿勢に変わりはないと思っています。

その姿勢はどちらの職業にとっても不可欠、根本的なものだと思いますよ。





## Q 学生時代にもっと勉強しておけばよかったと思うことはありますか？

## A たくさんありすぎます。

たくさんありすぎます（笑）。記者という職業は幅広い知識と見識が必要とされるのですが、恥ずかしながら私にはそれがありません。

いまから勉強してもいいのですが、こうも忙しいとなかなかそのための時間がないんですよ。

わからないことは政治、経済、法律、語学など多岐にわたります。ある程度はわかっていても、もう一つ深いところがわからないと裏の実情が掴めない。

学生のとき身に付けておくべきだったんですけど、専門は心理学でしたし、後悔だけなら誰でもできるんですよね、これが（笑）。

もちろん取材活動を通して実地で身についていくものも多分にあります。これから一つ一つ身に付けていくつもりです。

## Q 記者生活はどんなものですか？

## A 「3K」ですよ「3K」。

正直言って、記者生活に面白いことはなに一つありません。実を言うと、大学時代にはテレビ記者という仕事があることさえ知らなかったんですよね。

記者というと、側（はた）からみて楽しそうに思えるかもしれませんけど、仕事は趣味とは違います。同じことでも仕事となれば全てが辛いんです。

だから常に、仕事を戦いと考えています。毎日毎日が真剣勝負ですよホント。妥協は許されないし、結果がすべて。

結果の出せないものは消え、出せるものだけが残ります。当然、私は結果が出せるよう頑張っているつもりです。

それと、私はテレビ記者という職業は、真実を追究できるだけの「審眼」が必要だとも思っています。私利、私欲を捨てて曇りのない眼をもつことができるかどうか。

私見ですが、放送局に憧れる者の多くは、高い給与と社会的地位を得たいと思っているのではないでしょうか。もちろん全員が全員そうというわけではないでしょうけど…。

しかし、そこで働いているものとして言いますけど、記者という職は実際、「キケン」、「キツイ」、「キタナイ」、まさに「3K」ですよ「3K」。

放送局に入って派手な格好で、派手な振る舞いをしたいと思うような人は、記者になる資格がない、というかやめておいたほうがいいと思います。

家族、命、金や財産、地位、恋人や仲間、命、全てを失おうとも、真実を知りえたいと思えるか。知るためには命を惜しいと思わないか。記者とはそのくらいの覚悟がなければ大成できない仕事ですから。

## Q 今の学生に何か一言

実力のあるものが社会では生き残れます。もちろん運も実力ですし、社会では学力だけでなく、体力、気力などあらゆるものが総合的に評価され人間の価値が決められます。

それと、私自身ができなかったので後悔の念も含めて言うことですが、備えあれば憂いなしで学生時代に自分を磨き実力をつけてほしいと思います。実力があれば不況も恐れることはありませんよ。

●塩屋アナウンサー
NHK広島放送局
放送センター　アナウンス
現在「じゃけぇ広島」の
司会兼進行役
総合科学部03生

## Q アナウンサーの仕事内容はどういったものですか？

**A 番組の司会兼進行役のようなものです。**

私は月曜から木曜の夕方5時5分から生放送している「じゃけぇ広島」を担当しています。

内容としては各市町村の皆さんと一緒に番組を創ってお伝えしてるわけですけど、時には中継で出向いて、広島県内に住む魅力的な人々を紹介していきます。私は、その番組の司会兼進行役のようなものです。

原稿ってものがあまりないんですよ。それがニュースなどとの大きな違いです。どうインタビューするかってことは、任せられていて、事前に何を聞こうかっていうことを考えるわけです。

当然ながら、進行を覚えなきゃいけないですからね。私達がやっているのは、何も見ずに覚えるという形ですね。

## Q 仕事は大変ですか？

**A かなり不規則になりがちです。**

仕事は大変ですけど、何が大変かと言うと、時間がかかりますね。

毎日の仕事なんだけれども、番組が終わってから直ぐに明日の準備。流れを覚えなきゃならないし、明日何をやればいいのかってことを考えなきゃいけないわけです。結局、夜までかかっちゃうんですよね。

で、翌日に来て、朝の会議なんかがあって、今日は何をやるんだってスタッフ皆で打ち合わせをして、また本番に突入。その繰り返しです。

時間が不規則になりがちなのは、マスコミに限らずどの仕事でもそうだけれども、アナウンサーって仕事はかなり不規則になりがちなんですよ。

例えば地震があったりしたときなどは、ラジオは誰、テレビは誰々ってとにかく直ぐに決めて出て来なければならない。

今地域の番組をやっているからっていっても、地震があったときにはその瞬間からいきなり報道の仕事に当たらなければならない。それに、中継先に出ていたら大雨とかで被害があると、そこで直ぐに中継車ごと行くっていうようなこともあり得ます。いろんなことができなければいけないわけです。

アナウンサーであるんだけど、制作もするし、取材もするし、企画もするわけです。

## Q 民間放送のアナウンサーとの違いは何でしょうか？

**A 原稿を読むだけではないんです。**

NHKの場合、アナウンサーの役割がなかなかわかりにくい、っていうことはあります。

民放との大きな違いは原稿を読むだけではないというところです。東京に行ったらまた別ですけど、地域放送に従事したアナウンサーっていうのは数が圧倒的に少ないんですよ。そうすると、いろんな仕事をこなさなければならない。

リポートしたり、取材したり…。提案する企画っていうのは、アナウンサーが全て作らなければならない。しかも取材はネタから探し、何をやるかって構成立てて、喋るとこまで自分でやる。裏方の仕事もやる。ここで音楽流すとか、編集とかも全部します。

アナウンサーがやっている取材っていうのは、人が対象と考えてもらっていいんじゃないかな。僕らがやっているのは人間に迫る取材が多いんですよ。

我々の場合は、ニュース番組にしてもそうだけど、「もっとこうした方が良いんじゃない？」っていう発言の能力を高めるためには、自分で取材をしないとね、言えないんですよ。その点は総合的な力が要求される仕事ですね。

## Q 学生時代に身に付けたことは今の職業で活かされていますか？

全然、活かされてないです（笑）。あくまで私の経験で言わせてもらうと、何事も実地じゃないと身につかないと思いますね。学生時代っていうのは、いろんなことを学べば良いと思うんですよ。

私は西洋哲学とかがすごく好きでした。そういうことをいろいろと蓄積しておく、いろんなことを勉強しておく…例えば、バイトとか、大学の活動に熱心になるって言うのも良いし、いろんなことをやっておくことが良いんじゃないかと思います。何かを夢中になってやっていけば、そのうちきっと役に立つ、それくらいだと思いますよ。

大学時代に何やっていたっていうと、テレビばっかり観てましたよ（笑）何にもしなかった、本当に。

## Q 思い描いていたものと実際の社会のギャップはありましたか？

今の学生はある程度わかるかもしれないけれど、僕達の時代は社会の様子なんてさっぱりわからなかったんですよ。

まあ、バイトとかで少しはわかることもあったけど、僕なんて本当、籠の中の鳥って状態でした。大学のことしか知らなかったから、逆に社会のことを全く知らない状態でいきなり入っちゃたんですね（笑）。

社会との接点を持つようなことをやろうとは思っていました。だから、新聞は大学3年生のころから一所懸命読み出したんです。

社会への興味があったらから、たまたま上手くいったのかなって思いますね。

就職して困ったことは、意外と自分が何をやりたいかっていうのがなかったんですよ。そこで何を作るかっていうのがすごく困った。

1年目に取材に出たりしたんだけど、やりたいって思うことがなかったから、最初は何を聞いていいのかがわかりませんでした。

でも、いろんな人と話をすると勉強になることが多いんですよ。

考え方って言うか、話を聞いていくうちに、だんだんと興味深くなって、この世界にのめりこんできたっていう感じかな。

今はね、表現っていうよりも、取材に出て、自分で企画を立てる方が好きですね。

## Q 後輩たちに何か一言

総合科学部って、OBから言うとなんだけれども、基本的に幅広いけど、専門的な教育じゃないでしょ。

それは、マスコミに合っているという部分があると思うんですよ。つまり、いろんなことに取り組めるわけじゃないですか。

幅広いことをやるのには良い学部だと思うんですよ。だから、いろんな科目を受けて、いろんなことを学ぶことは、引出しが多くなるから、マスコミで役に立つかなって思ったりはした。

社会に出て、問題に出くわしたときにぐいって入り込めるような下地を作っておくことができるからね。

でも、自分の好きな分野に特化するっていうのも大事だと思います。研究職でこれ一本をやってきたっていうんだったら、色んなことに応用が利くと思いますよ。

マスコミの場合は、幅広く世の中の状況を知った上で、一つの事に修練していくっていくうスタンスだから、幅広く何事にも取り組んでおけば、社会に出て、役に立つかなとは思いますね。

# 取材を終えて。

## 特集～社会に出てからの仕事と大学で学べること～

取材対象がすべて同じ職種ゆえ、当たり前なのかもしれませんが、取材させていただいた方々は、口をそろえて3つのことをおっしゃっていたように思います。まず、マスコミの報道という仕事は、規則正しい生活リズムが保てないほどに忙しいということ。それから、学生という社会的地位と時間を無駄にすべきではないということ。そして、中途半端に体系的な学問へ手を出したところで役には立たないということです。

3つめは、特にカリキュラムとして専門性が薄くなる可能性の高い本学部にとっては、耳の痛い指摘です。本学部では、どのように講義を履修するかは学生本人に大きく任されているといえます。その柔軟なカリキュラムは、方向修正も可能であるということをはじめ、メリットは多いのですが、反面、吉浜記者の言葉をお借りすれば「低いレベルのもので満足してしまう」危険性が潜んでいることに気付かされます。

平成12年度入学生からのプログラム制においては、自由選択の22単位を他学部の専門科目で履修することができます。（従来のコース制では、理系は8単位、文系は12単位を他学部の専門科目で履修することが可能。）本学部の柔軟なカリキュラムでは、学生次第で専門性を高めることも可能です。しかしこの際、注意すべきことは、体系的な学問のカリキュラムです。例えば法学部で刑法を学ぼうとした場合、法学入門→刑法総論→刑法各論といった段階的な履修順序が存在します。その順序を踏まえずに途中から首を突っ込んだのでは、何が何やらわからぬままに終わってしまう恐れもあります。

就職難、破綻寸前の国家財政、世相は極めて暗くなっています。しかし、檜高記者がおっしゃったように、「学生時代に、自分を磨き実力をつければ、不況も恐れることはない」のかもしれません。我々は取材を通じて、しっかりした土台と骨格を合わせ持つ実力が社会では求められるのだと感じました。本学部の柔軟なカリキュラムの持つメリットを生かしつつ、その実力を培って欲しいと思います。